

2. 目標と方針

(1) 目標

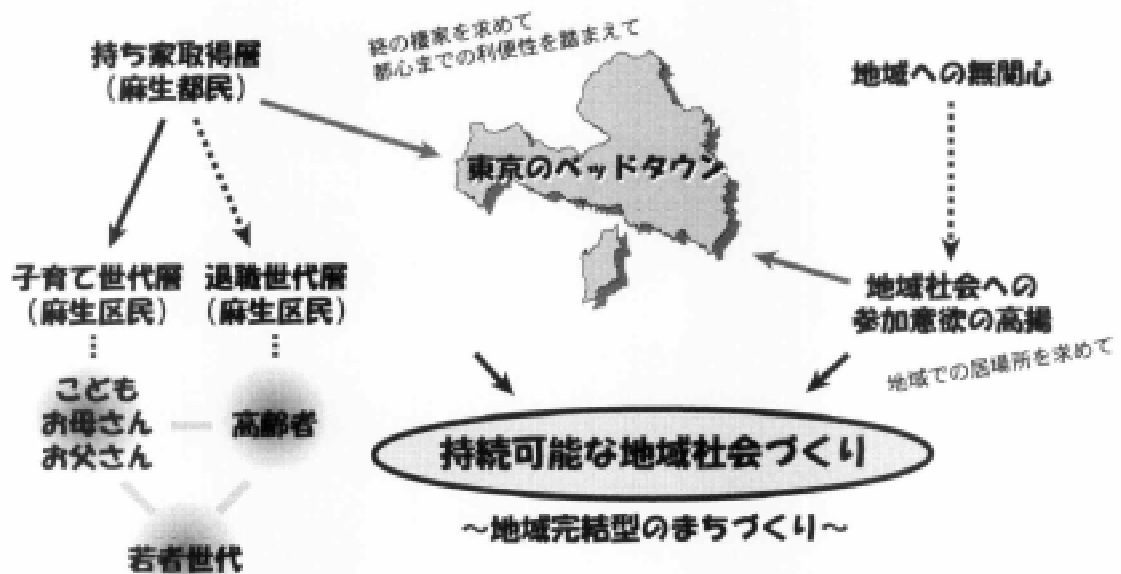
- ・現状・課題を踏まえ、麻生区の住宅市街地を考える上での目標を次のように設定します。

■住宅市街地テーマ別方針の目標（キャッチフレーズ）

持続可能な^{まち}地域社会を支える住宅市街地を形成していく

- ・麻生区には、東京圏のベッドタウンとして面的整備された住宅市街地が広がっていますが、これらの住宅市街地の多くは、持ち家取得層といわれるほぼ同世代の人々が、時期を同じくして移り住んできていると考えられるため、居住者の更新が行われないうちある時期を迎えると、同時期に開発された住宅地が、高齢化を迎えることが予測されます。
- ・麻生区は、サラリーマンファミリー世帯が多く住む地域であり、現在はまだ、地域に無関心な方が多いように思われます。しかし、近い将来、退職した世代の方が多い地域になることにより、現在「麻生都民」である層が、「麻生区民」として、地域内で24時間を過ごす区民が多くなっていくものと考えられます。
- ・このため、子育て世代層から若者世代、高齢者までのすべての世代が交流し、助け合うことにより、地域内でほとんどの生活活動が完結できるような地域社会づくりが必要になってきます。
- ・また、都市生活を基本としたライフスタイルが一般化するとともに、インターネット等のIT技術の進展によりフェイス・トゥ・フェイスの関係の必要性も薄れてきているように感じられます。麻生区も例外ではなく、最近では、近隣関係の疎遠さが指摘されるようになってきており、今後さらに問題化していくと考えられる高齢者単身世帯における緊急時の対応等について、地域で解決することができる目配りの効く地域社会をつくっていくことが重要といえます。
- ・これらの社会潮流の変化に対応した地域をつくっていくためには、ベッドタウンとしての麻生区の特徴を活かしながら、多様な世代がお互いを認めあい、お互いに助け合うことを通して、誰もが充実感を抱けるような暮らしを安心して送ることができ、かつ、それを次代に受け継いでいけるような“持続可能な地域社会づくり”を進めていくことが求められます。これが、誰もが「住み続けたい」と思えるまちづくりにつながるといえます。
- ・これには、そこに暮らす人々の創意工夫と合意形成を基に繰り広げられるソフト的な活動が必要となることはいうまでもありませんが、それらを支えるハード面での支援が不可欠となります。

■住宅市街地テーマ別方針の目標の基本となる考え方



① 持続可能な地域社会のすがた (イメージ)

・ 持続可能な地域社会の具体的な条件を次のように考えます。

○あるまとまった住宅地ごとに、地域住民が誇り・愛着を持てる“モノ”“コト”“空間”があること
 (誇り・愛着をもてる“モノ”“コト”“空間”とは？…他にない風景・資源・人の活動・営み・慣習・祭り・たまり場・癒しの場など)

○あるまとまった住宅地ごとに、地域住民が学ぶことのできる場・仕組みがあること
 (学ぶことができる場とは？…地域の歴史を学ぶことのできる場、地域の自然(緑・土・水など)を感じることのできる場、多くの世代が気軽に語らえる場、地域活動を支援する仕組みなど)

○あるまとまった住宅地ごとに、地域住民を守る仕組みがあること
 (安全を確保する仕組みとは？…外力に強いハード面の仕組み(都市基盤が整備されたまち)、外力に強いソフト面の仕組み(近所づきあい)など)

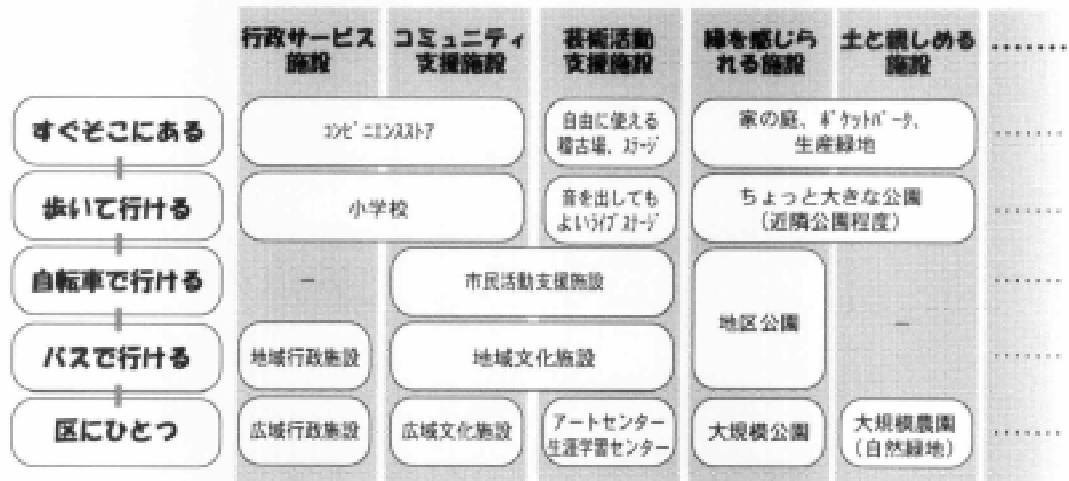


・ そして、これらの条件を満足するまちが持続可能な地域と考えます。

●あるまとまった住宅地ごとに必要な場や空間、仕組みが確保されていると同時に、いくつかの住宅地を束ねるかたちで、より高品質な空間や場、仕組みが存在するまち
 ～持続可能な地域社会～

- ・すなわち、生活に最低限必要な場が（すぐそこ）にあり、それより質の高い場が（歩いて行ける）ところ、（自転車で行ける）ところ、（バスで行ける）ところにあり、高品質な場がおよそ（区にひとつ）ある地域を“持続可能な地域”と考えます。

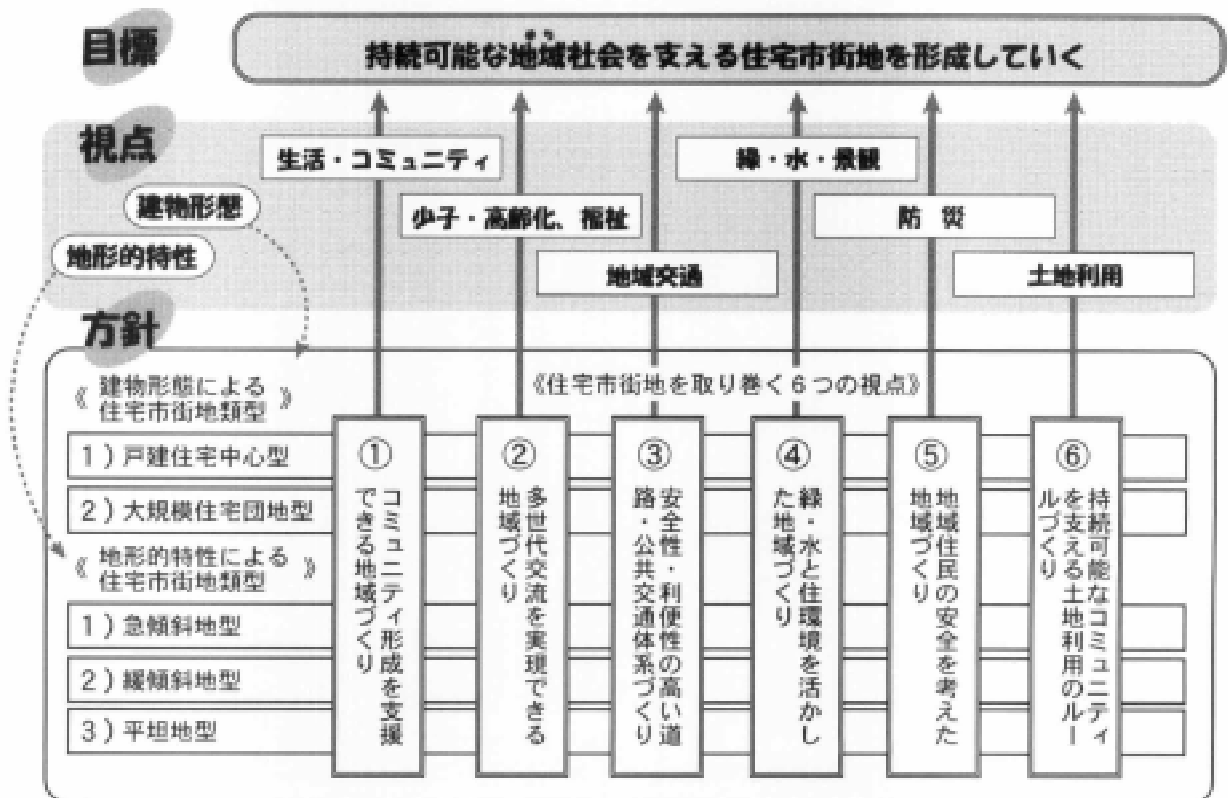
■持続可能な地域社会を支える施設配置のイメージ



（参考）アメリカのLife Frames,Incが提唱する“A Living Library”という考え方では、地域の文化や経済をさらに発展させる「場」として、地域独特の資源—人々・自然・環境・歴史・テクノロジー・美しさ—を活かした地域学習の「場」～これを「リビング・ライブラリー（生きている図書館：A Living Library）」と名付けている～をつくることが提案されている。

② 持続可能な地域社会を実現するためのまちづくり方針

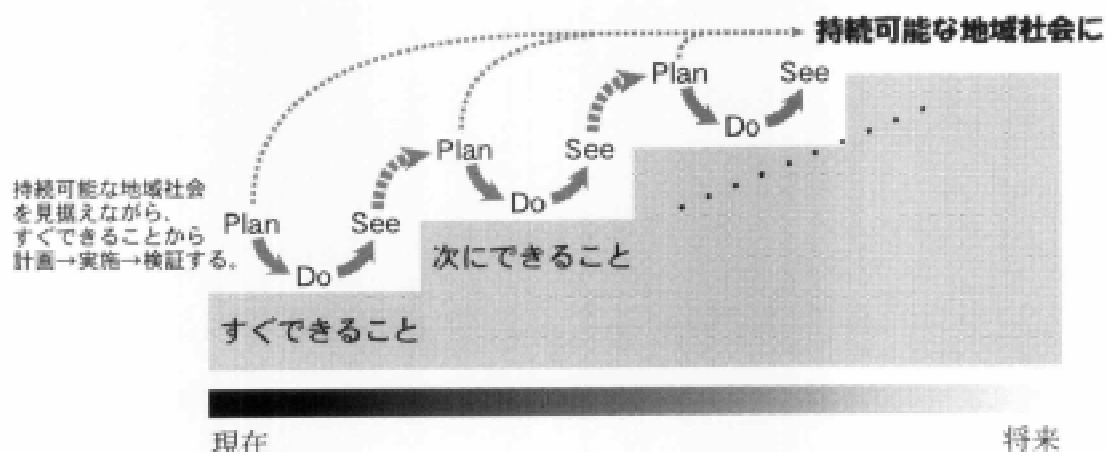
- ・次に挙げる6つの視点から、持続可能な地域社会を実現するためのまちづくり方針を整理するとともに、併せて麻生区の住宅市街地がもつ特性（建物形態、地形的特性）に応じたまちづくり方針も整理します。



③ 持続可能な地域社会実現までのステップ

- ・ 持続可能な地域社会をつくっていくうえでは、最初から理想的な最終形を一举につくり上げることを目指すのではなく、理想的な最終形を見据えつつ、比較的短いスパンで具体的なまちの将来像を描き、それに向けたまちづくりを進めることが必要と考えられます。そして、このスパンを積み重ねていくことで、自動的に“持続可能な地域社会”に近づいていくと考えます。
- ・ この短いスパンのまちづくりにおいては、地域のニーズを的確に捉えて、それに沿ったかたちでスムーズに機能するように、「計画（Plan）→実施（Do）→検証（See）」のサイクルを地域住民により進めていくことが必要と考えられます。
- ・ また、地域のニーズを的確に捉えるためには、ニーズを感知できる適正な規模の組織や仕組みが必要になるため、既存の町会を単位としながら試行錯誤を繰り返すことをとおして、生活圏を単位としたまちづくり体制をつくっていくことも必要になります。

■ 持続可能な地域社会実現までのステップ



Life Frames, Inc. & A Living Library

Life Frames, Inc. & A Living Library

住所：93 Mirabel, San Francisco, CA 94110-4614

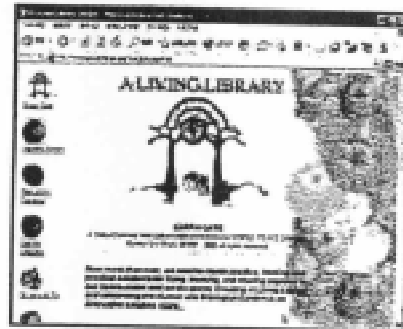
電話：(1) 415-206-9710

e-mail：bonnieora@alivinglibrary.org

http://www.alivinglibrary.org

創設者、事務局長 Bonnie Ora Sherk

(ボニー・オラ・シャーク)



使命

Life Frames, Inc.の使命は、各地にその土地と文化を学ぶことのできる、地域学習の「場」をつくることです。そのために、地域研究調査チームを組織し、その地域独特の資源—人々・自然環境・経済・歴史・テクノロジー・美しさ—を掘り起こします。そのような地域資源の蓄積を得た学習の「場」は、体系的なプログラムとプロジェクトベースの学際的なカリキュラムを持ち、活気ある生涯学習の場となります。さらに、地域の経済発展、開発を促進することが可能となります。

「リビング・ライブラリー」

Life Frames, Inc.では、上記のような地域学習の「場」を「リビング・ライブラリー(生きている図書館)：Living Library」と名づけ、これを通して、地域の文化や経済がさらに発展することを目指しています。「リビング・ライブラリー」とは、地域に存在する動植物・建築物・文化芸術・歴史・テクノロジー・教育活動・祭りなど、「その土地のすべて」を活かす「場」のことです。

～ 今日、私たちは日々の暮らしはもとより、地球規模での分かち合いを、かつてないほどに必要としています。私たちが自らの住む地域そして地球を讀え、みんなで幸せに楽しく暮らすために、「リビング・ライブラリー」をつくりましょう！ ～

- * 「リビング・ライブラリー」構想は、1981年にスタートしました。Life Frames, Inc.では、世界各地に点在する同様の拠点—生涯学習の施設など—をネットワークで結び、連携することを目指しています。
- * 「リビング・ライブラリー」は、現在、スミソニアン協会とそのInnovation Websiteの永久コレクションのひとつとなっています。
- * Life Frames, Inc.は、全体(トータルシステム)と個々の現象(サブシステム)が、相互に密接なつながりを持ち、関連づけられていることを証明するための事業を行っています。

創設者

ボニー・オラ・シャーク氏は、造園建築家、設計家、教育家であると同時に、芸術家でもあります。シャーク氏の作品は美術書、学術書、雑誌などに掲載され、世界各地の美術館で展示されています。氏は、25年間にわたってLife Frame・リビング・ライブラリー・Think Parkなど、体系的な都市計画・設計を行い、世界各地で実施してきました。

(2) 方針

(2) - 1. 6つの視点からみたまちづくり方針

① コミュニティ形成を支援できる^{まち}地域づくり ～生活・コミュニティの視点から～

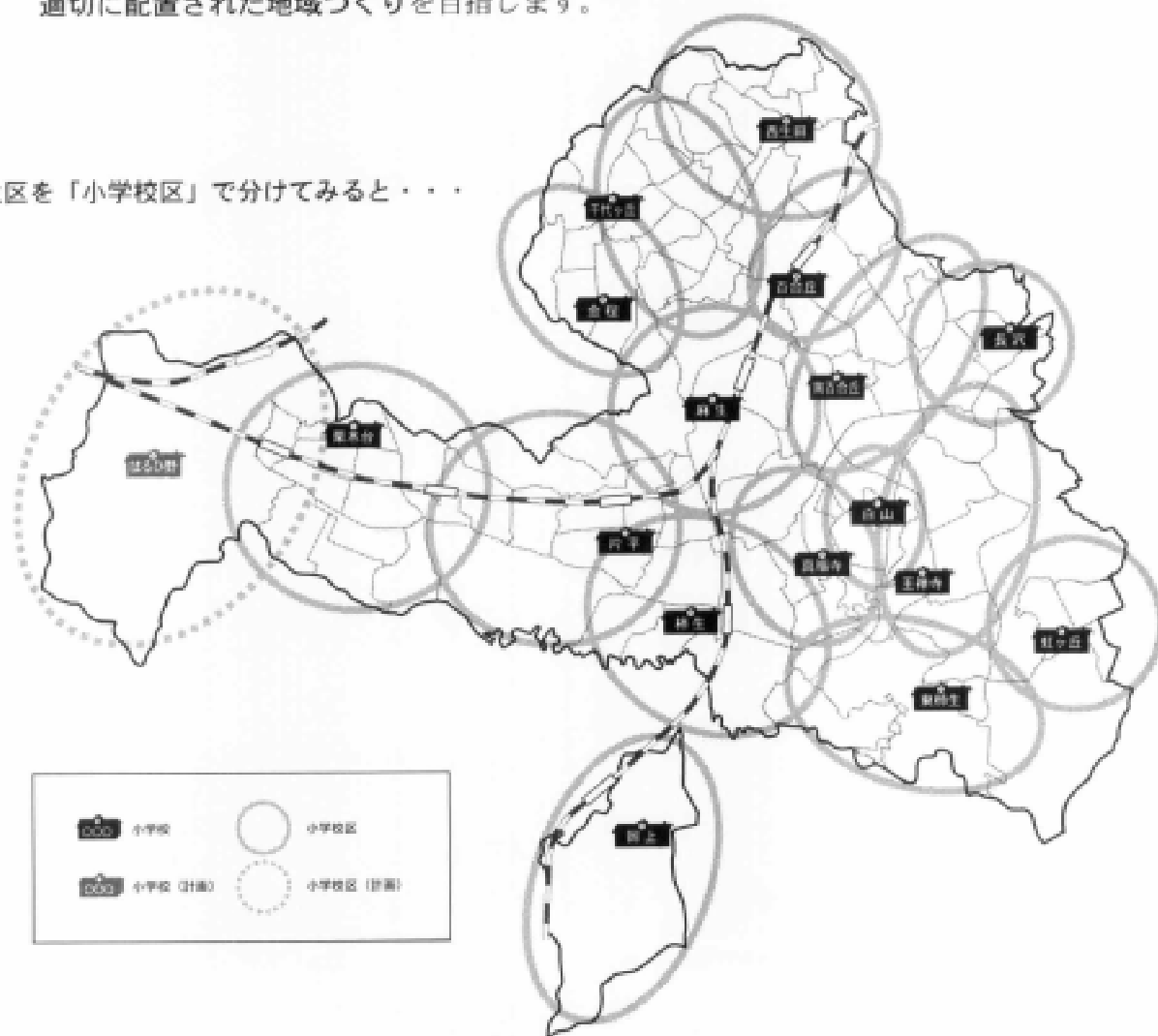
1) 現況と課題

- ・麻生区は、新百合ヶ丘駅周辺に映画館等を備えた広域的な商圈を抱えた商業集積がみられるため、その商業施設に頼りがちな面が否めず、住宅市街地内に地域住民のニーズに応え得る商業施設が立地していません。これは、商業施設に限ったことではなく、その他の市民生活に必要な機能も新百合ヶ丘に一極集中している傾向があります。

→持続可能なコミュニティづくりを進めるためには、人が日常的に生活する範囲（ほぼ歩いて到達できる範囲）程度のエリアを「生活圏（Life area）」と考え、基本的な市民生活は「生活圏」を単位として送ることのできる環境（地域）をつくる必要があります。

→このため、起伏に富んだ多摩丘陵に広がるベッドタウンである麻生区を、地形的特性やまちの成り立ち、市民生活のパターン等に応じて形づくられる「生活圏」に分けたうえで、いくつかの「生活圏」を束ねた「小学校区」ごとに、適切な施設が、適切に配置された地域づくりを目指します。

■麻生区を「小学校区」で分けてみると・・・



→一方で、インターネット等の気軽な通信手段が整備され、宅配サービス等を利用する機会が多くなることも想定されることから、必ずしも、生活に必要とされるすべての施設をワンセットで「小学校区」ごとに整備するということではなく、これらを「生活必需施設（小学校区ごとに配置）」「生活利便施設（中学校区程度ごとに配置）」「地域機能施設（4つの地域ごとに配置）」「広域機能施設（区に1施設を配置）」程度に分類し、それらのつながりを保ちつつ、バランスのとれた地域づくりをすすめる必要があります。

- ・これまで、町会（相互扶助的村落共同体）は、地域のコミュニティ形成に大きな役割を果たしてきましたが、個人による多様なライフスタイルが営まれている現在では、時代に応じて柔軟に変化できるコミュニティ組織のあり方が問われていると考えられます。
- ・また、新百合ヶ丘駅周辺地区への一極集中は、行動範囲が狭まってくる高齢者にとって住み続けることを困難とするひとつの要因となっているため、近隣において十分なサービス提供が行えるような条件を整備するとともに、これを補完するソフト面での支援策の検討をすすめる必要があります。

2) まちづくり方針

A. 生活圏を単位とした施設整備（ハード面の対応）

□生活者のニーズと効率性を踏まえた施設配置

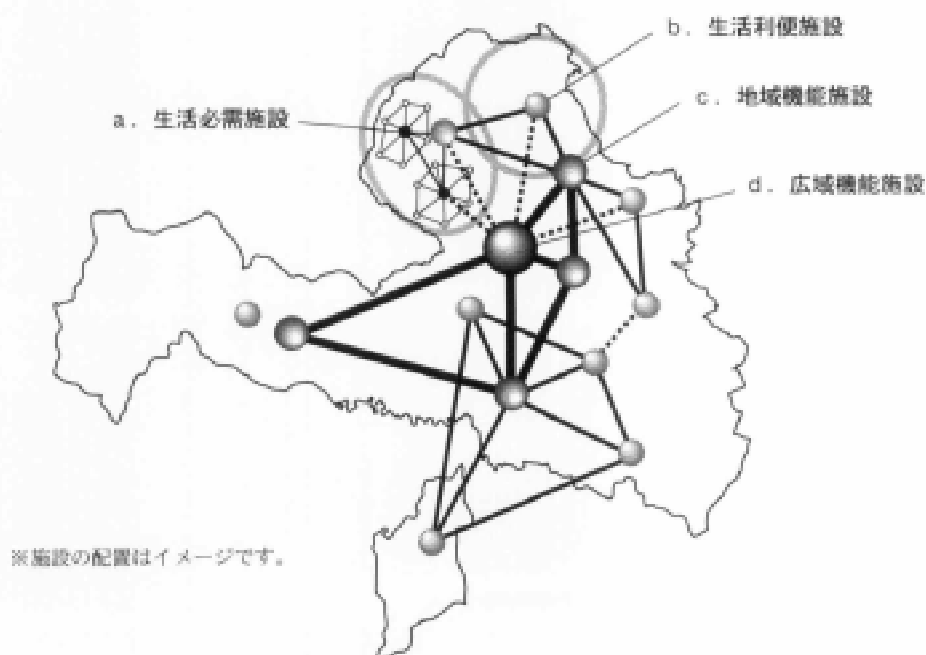
□小学校の余裕教室の有効利用

→文化活動、スポーツ活動、生涯学習活動、社会福祉活動、ボランティア活動等多目的な利用を可能とする改良や、仕組みの検討

→コミュニティ施設や社会福祉施設等への転用促進（行政の各セクションにおける横の連携強化が不可欠）

□遊休施設（空き店舗や低利用公共施設）など既存ストックを活用した施設整備

■施設配置の考え方



B. 生活圏を単位とした良好なコミュニティ形成（ソフト面の対応①）

□生活圏を意識できるコミュニティの醸成・支援

→必要に応じたコミュニティ組織のあり方の検討

C. コミュニティ施設の柔軟な利用を可能とする仕組みづくり（ソフト面の対応②）

□独り占めできないみんなの施設づくり

→地域に開かれた施設の運用促進

□行政の各セクションにおける横の連携強化

■コミュニティ形成を支える施設の分類

	買い物等の生活に最低限必要な機能	文化・芸術機能	緑・修景機能	
生活圏	○ 生活支援施設 《約200m圏》 →すぐそこにある施設— (生活圏(300~500世帯) ごとに1施設)	・コンビニエンスストア(食料品調達機能、チケット購入機能、書籍購入機能、銀行機能、郵便機能、防犯機能、薬局機能・・・など) ・リサイクル拠点 ・バスの停留所	・自由に使える 稽古場・ステージ	・家の庭、マンションの共有庭 ・ポケットパーク (街角花壇) ・生産緑地
	a. 生活必需施設 《約500m圏》 →歩いて行ける施設— (小学校区ごとに1施設)	・小学校(コミュニティ機能、スポーツ機能など) ・保育所 ・診療所 ・薬局 ・郵便局 ・近隣商業店舗 ・消防団施設 ・駐在所	・音を出しても怒られないライブステージ ・集会施設 ・移動図書館	・近隣公園 →長時間行っても息まない公園 →動物と遊べる公園 →アスレチックがある公園
		・インフォメーション施設(総合病院や広域的文化施設にアクセスできる仕掛け(端末)が整備されている施設)		
	b. 生活利便施設 《約1000m圏》 →自転車で行ける施設— (中学校区ごとに1施設)	・中学校(コミュニティ機能、高度地域教育機能、スポーツ機能など) ・市民活動支援施設 ・児童福祉施設(こども文化センター、老人いこいの家など) ・軽飲食施設(レストラン程度) ・地域商業店舗(スーパー程度)		・地区公園 ・まとまりのある市民農園
c. 地域機能施設 →バスで行ける施設— (4つの地域(駅圏域) ごとに1施設) ※基本的に駅併設・近接型施設とする	・地域行政施設(区役所出張所) ・銀行 ・地域文化施設(地区公民館) ・地域図書館(図書館分館) ・地域催し物会場(中規模ホール) ・地域児童福祉施設(子育て支援施設、デイサービスセンターなど) ・地域商店街的施設(商店街、ショッピングセンター)			
d. 広域機能施設 →区に1つある施設—	・広域行政施設(区役所) ・大学等の高等教育機関 ・高機能な医療施設(総合病院) ・消防署 ・警察署 ・広域商業施設(デパート等の大規模小売店舗、映画館など)	・アートセンター ・広場(モニュメンタルスペース) ・広域スポーツ施設(スポーツセンター) ・広域文化施設(市民館、大規模ホール、区民ギャラリー) ・広域図書館(中央図書館) ・歴史伝承資料館 ・ハイテク科学研究施設	・総合公園、運動公園等の大規模公園 ・まとまりのある農業空間 ・農業体験ゾーン	

□生活圏のモデル例

- ・麻生区では、宅地開発の単位ごとに町内会が組織されることが多く、下のモデル例のように、町内会界が複雑な形をしている場合がみられます。これは、開発地区の外側が山林であった開発当初は、地域コミュニティの原単位としての意味をもっていたと思われませんが、市街化区域のほぼ全域が宅地化された現在の麻生区においては、住居表示によって、いりくみをなくした簡明な境界線で区切られた町丁目界などを地域コミュニティの原単位と捉えた方が、地域住民が日常生活を送る圏域としては馴染みやすく、地域コミュニティ活動を行うのにも有効であると考えられることができそうです。

町丁目界程度の生活圏

